

「人」としての織田信長

中 村 直 勝

一

現代人に対する人物論でも、毀誉褒貶さまざまである。

人間にはそれぞれの個性がある。癖と言ってよい。好き嫌いがあがる。何となく合不相応（ふさい）がある。甲の人間は乙を好ましい人と思っても、丙の人には、その乙が好ましくない奴に見えるかも知れない。甲は乙を英雄であるかに崇めるかも知れないが、丙から見れば乙は、野望満々の凶徒であると見えることもあろう。

況んや史上人物に対する史論に到っては、甲論乙駁、帰終するところが無いであろうことは当然である。

二

その上、史上人物の論評は、その論評される基本の史料が、ともすれば二流三流の資料であったり、時には既に過去のものにすぎない編纂物によつての史論であるから——つまり根柢が弱いので——その所論は、その評論家自身の好き嫌いより、強く左右される。時にはわざと異説怪論を提出して、世人の意表を突き、自ら快哉を叫んでおるにすぎない場合が、往々にしてある。

三

近時史学の非常な発達があり、多くの学徒によつて、根本史料に基く史論が試みられるようになって、史上人物に対する評論も、やや正確さ

「人」としての織田信長